

◎中学生の部

その他の良い作品

僕の新しいき通学路

東中学校 一年

岩崎 朱里

公民館の一本桜の花が散り
若葉が初々しく美しい
袖の長すぎる制服を着て
シルバーに輝くピカピカの自転車
を走る
高速道路を渡る学校橋の坂を
お尻を立てて友達とひたすら漕ぐ
風音を残して車が高速道路を疾走する
下り坂は風のごとく気持ち良く走り抜ける
学校に近づくと同じ制服を着た中学生が
吸い込まれるように校門へ向かって走る
春の田中にはトラクターが轟音をたてる
通学路に沿って流れる小さな水路には
坂東太郎からの清らかな流れが続く

数日後 心細そうだったか弱き早苗は
気付くと若草色のじゆうたんのよう
水分を含んだそよ風が汗を冷やしてくる
毎朝 清々しく登校をさせてくれる
緑の田中に立ち尽くす真つ白な鳥は
自然のオブリジェかのように微動だにしない
小さなオタマジャクシがおどけて
コチョコチョコと泳ぎ回っている
そんな三田ヶ谷の春の景色である
幼い頃から見慣れた春の景色である
新しく中学生になったばかりの僕には
こんな何気ない景色も新鮮に感じる
今日も期待と不安の一日が始まる

高速道路のオーバー陸橋では
横風にもてあそばれてしまう
一緒に通うK君は必死にペダルを漕ぐ
それでも自転車から降りる友に合わせて
僕も並んで自転車を押す
先輩達はものともせず陸橋を越えていく
オタマジャクシもいつの間にか
枝豆ほどの青ガエルになっていく
やっと中学生になれたと思うこの頃である

稲のように

東中学校 三年

関根 杏華

朝 ドアを開けると 目の前に緑が広がる
田んぼ一面に広がった稲の緑
私はこの景色が大好きだ
周りが田んぼの道を 自転車で通り抜ける
さわやかな風がほおをなで
さわやかな風が私の背中を押してくれる
「頑張れ」と応援してくれる
だから私も頑張れる
昼 稲は朝よりずっと 青々とそして
キラキラと光っている
夏の暑く照りつける太陽の光を浴びて
グングン成長している
もっと高くもっと強くと 成長している
エネルギッシュな稲の様子は
いつも私に力をくれる
どんなに夏の日差しが暑くても
稲は成長し続けている
私ももっと成長しよう

辛いときや苦しいときがあるかもしれない
でも、太陽に向かって伸びる
稲のように
めげずにまっすぐ伸びていこう
太陽の光をたくさん吸収して成長する
稲のように
私もたくさんのお話を吸収し、蓄え、
成長しよう
少しでも実が多くなるように
黄金のように輝く
稲穂のように
キラキラと輝けるように

こんなところがあったんだ

西中学校 二年

中山 美空

ある日の出来事。
とある陸橋の上を車で上ったとき、
『わー、きれいーい、こんなところがあったんだー』と君が言った。
その時、みなれた風景だったため、私は、ボ
ーッとしていた。
雨上がりの午後、羽生の街が一望できる陸橋
の上で、君は感動していた。
雲の切れ間から太陽の光がさしていて、その
光の帯を『天使のはしご』と教えてくれたね。
近くのショッピングモールに向かうときに通
る陸橋。
通い慣れた陸橋。
君は素敵な場所だと教えてくれたね。
ありがとう。
あらためて考えてみると、西に富士山、北に
みんなの家、南に田園風景、東は・・・。
やっぱり、みんなの家がある。
いい場所だね。

教えてくれた親友と、きれいな風景に、私は
ふるさとの良さを知った。
大切に、大事に、みんなの心が一つになった
とき、きれいな街が輝きをますだろう。
親友と共に、ふるさとを思った景色が、そこ
にはあった。

道

東中学校 一年

西澤

雪菜

桜がヒラヒラと舞う
暖かく太陽がほほえむ
新しい制服に袖を通す
期待に胸をふくらませて
自転車で駆けたあの道

田の稲が足をくすぐる
ギラギラと照りつける太陽
小麦色の肌にすーっとたれる汗
暑い暑いと言いながら
水泳学習へと向かったあの道

紅く色をつけた葉
まだ夏の余韻が残る太陽
薄い上着を羽織り
もうこんな季節なのかと
どこか懐かしさを感じたあの道
霜の降りたコケを

優しく照らす太陽
鼻の先を赤くして
手と手を擦り合わせながら
辺りを囲う霧に目を細めたあの道

あの道も
この道も
全部私のふるさとなんだ

思いをつなぐ

西中学校 二年

春山 良太

曾祖父の家の桜の木
曾祖父が家を建てた時に植えた桜の木
もう百年くらいになるこの桜の木
春になると見事な花が咲く桜の木
ぼくの母も、祖母も、そして曾祖父も
ずっと見てきた桜の木
桜の木の年輪には、曾祖父の思い出
祖母の思い出、母の思い出が沢山
詰まっている
沢山の歴史を背負って誇らしく
優しく見守ってくれている桜の木
ぼくが生まれた時からずっとずっと
ぼくたちを楽しませてくれている桜
保育園へ入園した時、
小学校へ入学した時、
中学校へ入学した時、
いつも満開の桜が祝ってくれていた
満月の夜には、月明かりに照らされた桜が
とてもきれいだ

曾祖父も空から見ているのかな
ふと考えた
何気なく咲いているかのような桜だ
でも違った
ぼくの会ったことのない曾祖父が
大事に育ててきたこの桜の木
不思議と感謝の気持ち湧いてきた
当たり前のようで当たり前ではない
ここにこうして生きていくぼく
桜の木と共に強く生きていきたい
そして「思い」をつないでいきたい

夏の色

東中学校 三年

宝藏寺

杏菜

少し視点を変えただけで
たったそれだけで
くすんでいた色たちが鮮やかになった

私は夏が嫌いだった
暑くて寝苦しい夜
肌に突き刺さる太陽の光
少し動くとふきだす汗
額に貼り付く前髪
急な雷と激しい雨
ミーンミーンと鳴くセミの声
どこからか湧いて出てくる大量の虫
いやなものばかりだ

私は夏が好きになった
上を向くと視界に広がる青い空
空を泳ぐ白い雲
青々とした葉をつけるたくましい木
自転車をこぐと吹いてくる
髪をゆらす心地良い風
雨上がりの空に架かる七色の虹
虫の声まで聞こえる静かな昼
美しいものばかりだ

僕たちの利根川

東中学校 一年

細井 大暉

小学四年の夏
台風の過ぎた後の利根川は
いつもより水かさが増していた
七人乗りのボートに乗りこみ
息を合わせてこいでいく
額に汗がにじむ蒸し暑さ
体に当たる風の心地よさ
ボートに当たり飛んでくる、水しぶきの気
持ち良さ
その時、「バシヤン」
水しぶきのする方に目を向けると
誰かがさけんだ
「ハクレンだ」
体長五十センチ位の巨大なハクレンが体を
くねらせ飛び跳ねた
息つく間もなく、次々と迫力のあるジャン
プをくり広げた
まるで僕たちを歓迎しているかのようだ
川岸には直径五センチ程の土でできた無数

の穴
ガイドさんがカワセミの巣だと教えてくれ
た
樹木の上には額が赤く目立ったバン
浅瀬には可愛らしいカルガモの親子
上空には優がに羽を広げたトンビ
利根川には様々な生き物が暮らしている
そんな豊かな利根川の自然を
僕たちは守り続けなければならぬ
この先もずっと

思いをメロディーに

西中学校 一年

森田 有紀

私は中学校生活を
楽しみにしていた
それは部活 吹奏楽部

小学生の時
吹奏楽部の演奏を見て
かっこいい私もやりたいと思った

実際に楽器を吹いてみると
全く違う
吹いても吹いても
音は出ない
思っているより難しい
少しずつ音が出てきた
曲となるととうてい無理だ

六月に入り
夏休みにコンクールが
あることを知った

初めての大会大舞台そして三年生との
最初で最後の演奏
どうしても出たかった
毎日毎日一生懸命練習した

メンバーが発表された時
心の中でガッツポーズをした
今、学校から文化ホールまで
風を切って自転車の
ペダルをこいでいる

ドキドキとワクワクが
止まらない
失敗してもいいから
7分間を思いきり楽しもう
思いをメロディーにのせて
仲間を信じて
そして自分を信じて

成長

東中学校 一年

山下 蒼太

田んぼで青い稲が
風に吹かれて揺れている
僕が中学生になってすぐ、
父と叔父と一緒に
種をまいた稲たちだ

背の低い稲をみながら
自転車通学が始まった
雨の日も風の日も
こんなに変なんだと知った

父は、仕事の行き帰りに
水の管理や草刈り、肥料をあげて
田んぼを見守っている
それに答えるように稲は大きく成長した

僕は部活動に力を入れている
先輩みたいに上手になりたいと
練習にはげんでいる

暑い日射しの中、
真っ黒に日焼けして練習している

ふと稲を見ると穂が出ている
ずい分成長していた
僕も負けずに成長したい
毎年繰り返し返される稲作と共に
自分も成長していけたらと思う

もうすぐ夏が終わる
赤とんぼがとびはじめた
稲刈りが近づいてきた
新米を食べる日が、
とても待ち遠しい

変わらないもの

東中学校 二年

吉田 直哉

毎日学校へ行き
友達と共に学び合う
それがあたり前だった
一日一日の経験が
僕らが大人になる
大切な一歩だった
昨年
今までできていたことが制限され
あたり前のことが出来なくなった
学校が開会した日
あの日の空の高さ
そろいはじめた稲の苗の青さ
それを渡る風の心地良さ
ぼくの町の自然・生き物
全てが生命力を持って
輝いてみえた
目に映る自然の景色が
僕らの背中を

力強く押してくれるのを
肌で感じた

「今日」があること
「明日」があること
何気ない毎日が僕をつくる
僕は今日も
朝のひんやりと澄んだ空気の中
緑の通学路を風を切って走りぬける
学校で友と学び合い
家に帰って
今日の楽しかったこと
出来事をまぶたに浮かべ
明日への希望に胸をふくらます
僕らの日々が変化しても
この変わらない景色の中で
僕は明日を生きていく